

小笠原諸島（父島）と内地（東京）を定期的に結ぶ唯一の交通手段、おがさわら丸



# 小笠原諸島の ことばと人びと

ダニエル・ロング 首都大学東京教授

*Daniel Long*



小笠原諸島の位置。住民がいるのは父島と母島だけである

おがさわら丸を見送る人びと

## 海洋島の島々

小笠原諸島は、二〇一一年六月にユネスコの世界自然遺産に登録されたから知名度が上がった。日本本土から一〇〇〇キロメートル離れたこれら島々は、琉球諸島のような「大陸島」とちがって、大陸とは一度もつながったことのない「海洋島」で、数千万年前の海底火山活動とその後の隆起によって誕生した島である。南には小笠原村に属する硫黄諸島があり、そこからマリアナ諸島までは五四〇キロメートルある。孤立しているため、地球上で小笠原だけにしかない固有の動植物がみられる。オガサワラオコウモリをはじめ、植物一六一種、昆虫二七九種、カタツムリ一〇〇種を含む数百種類の固有種を誇る島々である。小笠原の動植物や地形も興味深いのが、人間社会とその産物である言語や文化にも非常に独特な現象がみられる。以下でそれについて考えてみたい。

## 小笠原諸島に往来した人びとの歴史

小笠原の言語を考えると歴史を四つの時期に分けることができる。一八三〇年までは無人島だったので、ある意味でこれは第零期に

あたる。現在小笠原諸島が世界的に Bonin Islands という名で知られているが、これは無人島が訛つてできた名称である。第一期の「開拓時代」は、西洋や太平洋諸島から人びとが住み着いた一八三〇年に始まる。英語を母語としない島民が多かったが、やがてピジン英語のようなものが島社会の共通のコミュニケーション手段となっていたようである。第二期の「日本化時代」は一八七〇年代に本格化し、在来島民は日本語を習得した。第三期の「米軍統治化時代」は終戦直後に始まり、日本人以外の血を引く「欧米系島民」だけの在住が認められ、学校教育は英語でおこなわれた。しかし、家庭内では英語と日本語が入り混じった小笠原独特な混合言語が発展した。第四期の「返還後時代」は一九六八年に欧米系以外の旧島民の帰島が許された後に始まり現在にいたっているのである。

### 第一期 開拓時代

小笠原諸島に最初に住み着いたのは西洋と太平洋諸島をはじめとするさまざまな地域からきた人びとである。前者には、アメリカ合衆国のニューイングランド地方、イギリス南西部、北大西洋のバミューダ島、ドイツ、ポルトガル領で西大西洋のアゾレス諸島やカーボベルデ、フランス、デンマークなどからやってきた西洋人がいた。後者からはハワイや



父島の中心、大村

タヒチ、北マルケサス、キリバス、ポナペ、グアム、ブーゲンビル、フィリピンそしてインド洋のマダガスカルからである。日本人が入植する前に、西洋と太平洋諸島の人びとは結婚を繰り返し、文化と言語も入り混じっていた。

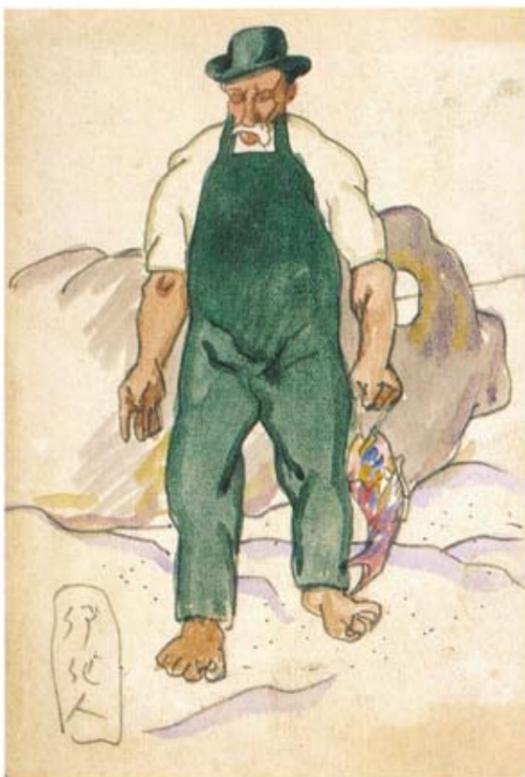
## 第二期 日本化時代

日本人による入植が始まった一八六〇〜七〇年代に、それまで島に住み着いていた人びとが日本国籍を取得し、「帰化人」とよばれるようになった。大正時代に島に滞在した画家倉田白羊が描いた「帰化人」と題した絵があるが、これは開拓時代初期の開拓者ナサニエル・セーボレー氏の息子ホーレス氏と思われる。

長崎や神戸などに西洋人が暮らしていた異人館があるが、小笠原でもかつて「異人」という名称が使われていた。現在それは「異人モモ」(グアバ)や「異人ドーナツ」(沖縄のサーターアンダギーのような揚げ菓子)などいくつかの単語に名残がみられるのである。一九世紀後半から入ってきた日本人の多くは八丈島出身だったため、現在その子孫は「八丈系(島民)」とよばれている。

## 第三期 米軍統治時代

戦後に小笠原諸島はアメリカの統治下に置



「帰化人」(倉田白羊 1914年) 埼玉県立近代美術館蔵

かれて、西洋の血を引く島民のみが米海軍からの許可を得て島に住むことになった。西洋人の血を引かない島民は日本本土や八丈島などでの生活を余儀なくされた。彼らは故郷への帰還を求め、返還運動を起こした。自分たちのことを「旧島民」とよび、米軍とともに島で暮らしている者を「欧米系(島民)」とよんだ。

## 第四期 返還後時代

一九六八年、返還後に旧島民が故郷に戻れるようになった。また彼らとちがって戦前の

小笠原にルーツをもたない人で、返還のニュースをみて、島に移住することを決意した人びとも大勢いる。「新島民」とよばれる。

## 島民とは

現在も島でもっとも頻繁に聞く言い方は「欧米島民、旧島民、新島民」の分類である。「欧米系」という言い方は誤解があるかもしれないが、これは「西洋だけのルーツ」という意味ではない。欧米系はみんな太平洋諸島の先祖をもっているし、そのことを大変誇りに

思っているようである。さらに彼らのほとんどは日本民族(旧島民)の先祖ももっている。つまり、「欧米系」は「西洋のルーツしかもたない」ということではなく、「西洋人の先祖をもつ人」である。それに小笠原は日本や西洋と同様父系社会なので、父方の先祖が欧米系だった人は「自分は欧米系だよ」と意識しているが、母方の先祖が欧米系だった人はそうした意識が薄れている。これは何も小笠原の特殊な事情ではなく、父系社会はそんなものである。筆者が「ロング家」の人というアイデンティティをもっているのは、「父方の先祖がロングという苗字だった人」であり、母方より父方の系統を意識しているのである。つまり、「欧米系」は厳密に使われる言い方でもない。厳密に使うのが不可能である。むしろ個人が自分のことを「欧米系」と思っているかどうかはアイデンティティにかかわる。アイデンティティとしての「欧米系」には男女差も世代差も生じているようである。親子でもこのことばに微妙な差異がみられる。米軍統治下時代に育った父親は「うん。僕は欧米系だよ」と表現するが、返還後に育った息子は(誇りをもちながらも)「うん。僕の先祖は欧米系だよ」と表現する。「欧米系」を自分自身のアイデンティティとして捉えるか、ルーツとして捉えるのかは微妙な変化が現代の若者のあいだで起きているかもしれない。

## 小笠原諸島のことばと人びと



同じ東京都でも1,000キロ離れている

を合わせた言い方であり、本人が島に住み着いたのではなく、代々島にルーツをもつ人びとのことを指す。「島民」はただ単に住民票を移している人びとの総称である。この用語の使い分けによって興味深い意味論的現象がみられる。たとえば、筆者が実際に耳にした次のふたつの会話をみていただきたい。ひとつめの会話は東京からの船を降りる欧米系島民（瀬堀さん）と波止場にいる旧島民（菊池さん）とのあいだのやり取りである。

菊池さん…えっ？ 内地行つてた？ お  
 帰り。東京どうだった。  
 瀬堀さん…おっ。内地は今寒いじゃ。村  
 議会選挙どうだった？ みえ子さ  
 ん当選した？  
 菊池…だめだったよ。  
 瀬堀…ええ？ 本当？  
 菊池…ん。島の人皆彼女に票を入れたの  
 にね。

この会話でもし「島民」と「島の人」がまったく同義語ならば、最後の発話に単語を入れ替え「島民皆彼女に入れたのに」と言えるはずである。しかし、それは民主主義の常識に反するナンセンスな発言となる。筆者が小笠原の人びとにこれらふたつの名称の意味が微妙にちがうと言ったら、島人は「そうなのか？」と答える。つまり、その意味のちがいや使い分けは意識にのぼるとは限らないが、以上のような実際の会話例から意味がずれていることが明らかである。

こうした意味論的ながいを（無意識にかもしれないが）守っているのは別に「島の人」本人たちだけではない。島の生活がまだ一年未満だった女性が父島奥村地区にあるバーでアルバイトをしていた。その時カウンターに座って飲んでいたお客さん（土木関係の仕事をやっている長期滞在者）と彼女とのあいだに次の会話がおこなわれた。

土木関係者の男性…島の人ですか？  
 バーの女性…いや、島民ですけど……。

すなわち、「島の人ではないが、島民ではある」という回答であった。本人がどこまで意識しているかを別として、小笠原で暮らしている人びとは何となくふたつの用語にちがいを覚えているようである。

返還は一九六八年だったので、「新島民」のなかにも半世紀近く住んでいる人がいる。一方でさほど在住歴は長くないが、島で根を下ろしている人は「新新島民」とよばれる。小笠原は他の離島とちがって、二〇歳代の人には非常に多い。なかには数ヶ月島で生活して、仕事をしながらダイビングなどを楽しむ人もいる。この人びともひとつのカテゴリーとして認識されているぐらい多い。数年前に『長期滞在者のための小笠原観光ガイド』（松木一雅著）と題した本が出版されるほどであった。

なお、「しまのひと」という言い方も聞くが、「島民」は皆「島の人」とは限らない。「島の人」はいつてみれば「欧米系島民」と「旧島民」

ついでにいうと、筆者やその研究仲間とはとき欧米系島民との対照で「日系（島民）」のような言い方をするが、「日系」は島民のあいだでもちいられるわけではない。  
 また、民族学や社会学、言語学に興味のある読者があるかもしれないので、触れておくが、ここで取りあげた名称には差別的な響きがあるうんぬんという話を聞いたことがない。筆者は小笠原の長期滞在者になったことはないが、五〇回以上にわたる島での研究や教育活動を通して、「欧米系」とよばれて嫌な感じがした」のような否定的なコメントを聞いたことはない。

春にさかんになるホエールウォッチング





フンパ(オカヤドカリ)が描かれた動物注意の看板

領	本
二八三	二八七
海濱の捕獲禁止区域をウミガメ及び卵の捕獲禁止区域とし、島周辺約十ヘクタール以内にし、期間を4/1、8/31に拡大する	ウエントルの捕獲禁止を請願する
あり亀の禁漁期間を6/1、8/14に短縮するよう請願されたが、不許可となる	ウエントルの捕獲が禁止される
ウエントル(未成熟亀)の乱獲が行なわれる(三ヶ年続く)	これより四ヶ年毎年二十頭の仔亀を標識放流する
	亀の捕獲が禁止される

ウエントル(ウミガメ)の捕獲についての年表



フベ(カツオドリ)

い数百年しかない。

冒頭で述べたように、小笠原諸島は海底火山が海面から突き出た島々なので、元々動植物は皆無だったはずであるが、数万年をかけて、虫や鳥、植物の種子などがさまざまな方法で島に辿り着いて定着している。島にいる自然解説者たちはこの説明に「三つのW」という表現を使っている。すなわち、Wind(風に運ばれた)、Wave(波によって流れ着いた)、Wing(みずからの翼の力で飛んできた)という三つの来島方法である。人間によって(意図的または偶発的に)もちこまれた「外来種」とちがってこうした「広域分布種」は

島での歴史が長い。例としてあげられるのは、オカヤドカリやカツオドリなどである。「固有種」は島に辿り着いてから独自の変化を遂げて別の種へと進化した動植物を指すようである。小笠原の花として指定されているムニンヒメツバキやオガサワラオオコウモリ、母島にしか生息しない鳥メグロはいずれも小笠原の固有種になっている。固有種はDNAの変化によって生まれるので、島での歴史が長い。

ここまで述べたのは、生物自体が「固有種」か「広域分布種」か「外来種」かの話である。これからはこうした生物の名称を含めて、小

### 生物学から言語を考える

生物学者は小笠原の生物を「固有種」、「広域分布種」、「外来種」に分類している。一方で言語について考えるときにはその言語の発音体系(母音や子音がいくつあるか)と文法体系(語順や活用方法など)と語彙(辞書に載せる単語)の三つの要素を考慮しなければならぬ。以下で、生物学のこの三分類を借りて「小笠原ことば」の語彙(単語)について考察してみたい。しかし、やはり生物と言語はちがうので、単語を「固有種」と「広域分布種」、「外来種」とよぶのはあくまでも比喩だけであり、この喩えには限界がある。単語の例をみる前にまず、生物と言語のちがいを確認しよう。

生物学でいう「外来種」は人間によって島にもちこまれた生物のことを指す。小笠原諸島にもちこまれた狩猟用のヤギや食用のアフリカマイマイ、害虫退治のためのオオヒキガエル、ペットのグリーンアノール(トカゲ)や猫、木材とともに誤ってもちこまれたシロアリ、園芸用のハイビスカスや木材用のアカギなどが野生化し、生態系に悪影響を与えている。小笠原の場合、人間が最初に上陸したのは三四〇余年前で、人間が定住したのは一八〇余年前なので、外来種の歴史はせいぜ

### 言語的固有種

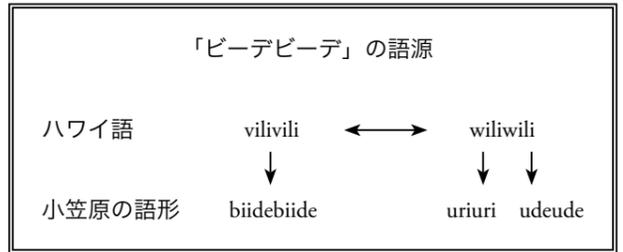
笠原ことばの単語が「言語的な固有種」か「言語的な広域分布種」か「言語的な外来種」であるかという考察をおこなう。

さて、上で述べた「生物学用語を言語の説明に使うことには限界がある」という話にここで戻る。小笠原で誕生した単語は少ないが、いくつかみられる。グリーンペペ(光るきのこ)やセンマチ(船舶待合所)、ギョサン(漁師のサンダル)などはこれにあたる。これらを生物に喩えると、「言語的固有種」にあたる。いずれも二〇世紀の半ば以降に島でつくられた造語である。すなわち生物の場合、固有種は比較的歴史の古いものであるが、「言語的固有種」は他の単語に比べて新しい場合がある。ヤロッドは英語の yellow wood(黄色い木)、ローズードは英語の rose wood(薔薇の木)がそれぞれ島で訛つてできたもう少し古い単語である。この類は winter turtle の訛語に由来するウエントルが含まれる。未成熟のウミガメを指す単語である。大きく成長したウミガメは冬になると日本本土やハワイなど遠くへと旅立つので、冬に捕れない。島の人間にとって重要なタンパク源だったウミガメは、冬に捕れるのは島近海に居付くウエントルだけである。

# 小笠原諸島のことばと人びと

欧米系島民のあいだで生まれた不思議な挨拶ことば「マタミルヨ」も小笠原でしか使われないという意味では言語的固有種といえる。この表現にみられる単語そのものは日本語だが、英語の see you again の直訳として使われている。言語学的に説明すると「英語の意味領域に日本語の語形をあてはめた」表現である。食べ物の名称ピーマカやダンプレンのも言語的固有種といえる。前者はハワイ語の pimika (お酢の意味) に由来する生魚の酢漬けである(ちなみに、もつと遡るとハワイ語の pimika のルーツは英語の vinegar にある)。元のハワイ語のピミカの母音が i から a に変わり、意味がお酢そのものから酢に漬けた魚料理というふうに変化しているのである。すなわち、音声変化と意味変化の両方を起こしているから言語固有語といえる。ダンプレン(洋風すいとん)は英語の dumpling に由来するが、母音が i から e に変化している。カツオドリを指すブベ(英語の booby に由来する)にも同様の母音変化がみられる。開拓時代の入植者には英語のマサチューセッツ方言を話す人がいたが、この i ↓ e の音声変化はその影響だと思われる。発音が変化している単語もあれば、意味や文法的な性格が変わった単語もある。八丈語(八丈島方言)に由来するナムラという単語が前者にあたる。元々は「魚群」からきたと思われる、魚の群れのみを表していた単語であるが、段階的に変化し、陸の生物にも使われるようになり、「ヤギのナムラがいた」などが使われるようになった後、さらに人間にもあてはめられるようになり、「向こうから自衛隊のナムラが歩いてきた」のように意味領域が広がった。

文法変化として、ホゲル(散らかす)という八丈語に由来する動詞があげられる。元の用法では他動詞しかなくて、「部屋をホゲルなよ」のように使っていたが、米軍統治下時代には他動詞から自動詞へ変化した。その時代には島が日本本土との接点がほとんどなく、英語による学校教育がおこなわれ、日本語の「規範意識」(何が普通の日本語か、何が正しい日本語かという意識)が薄かった。その時代には若い欧米系のあいだで、ホゲルが自動詞だと勘違いされて、ホガスという他動詞が新たに生み出された。この変化した用法では、「部屋をホガスなよ」という言い方に対して、「部屋がホゲテイルんじやないか」という言い方が生まれた。これは「燃える・燃やす・焦げる・焦がす、出る・出す、増える・増やす」のような自動詞・他動詞の対になっている動詞への「類推」として説明できる文法的变化である。いづれにせよ、元々の八丈語とは文法的な使い方がちがうだけに「言語的固有種」と言える例である。



ビーデビーデとよばれる木(沖縄でデイゴという名で親しまれている)は小笠原の象徴として広く受け入れられている。小笠原高校の学園祭の名前や紀要の題目としても登場する。

言語学者として興味をそそられるのは、この「ビーデビーデ」(ウリウリやウデウデとも表記されるが)がその起源とされているハワイ語の wiliwili からどのように派生したのかということである。日本人の入植者が初め

て来島したときに、そこでハワイ語が島民のあいだで使われていたとしても、おそらく「ウイリウイリ」としか聞こえないだろう。この形がどのようにして「ビーデビーデ」に変化したのであろうか。明治初期に日本人がビーデビーデとウリウリのようにまったくちがう発音として認識しているのは、当時の欧米系島民が vilivili と wiliwili の両方の発音を使っていたと判断するのが妥当である。日本の方言の多くで d と r, e と i がよく混同されるため、ウリウリとウデウデは密接な関係にあるといえる。

ウリウリの u がハワイ語の wiliwili の wi から変化しているという可能性も十分考えられる。wi が日本語の音韻体系に存在しないために ui となるか、単純に u へと置き換えられたと考えられるからである。同様に、ハワイ語の i が日本語のはじき音 r として発音されることもわかる。島民達のことばには二〇世紀になつてもなお w と v とのあいだで揺れが起きているが、この変異はハワイ語にも存在している。図に以上の語源説を示した。

小笠原にはタコノキという植物がある。幹から気根が地面に付いて強風が吹く熱帯の島で木を支える役割を果たしている。その形はタコの足に似ていることからこうよばれている。小笠原村の木として公式に指定されている。学名が *Pandanus boninensis* になっている

欧米系島民のあいだで生まれた不思議な挨拶ことば「マタミルヨ」も小笠原でしか使われないという意味では言語的固有種といえる。この表現にみられる単語そのものは日本語だが、英語の see you again の直訳として使われている。言語学的に説明すると「英語の意味領域に日本語の語形をあてはめた」表現である。食べ物の名称ピーマカやダンプレンのも言語的固有種といえる。前者はハワイ語の pimika (お酢の意味) に由来する生魚の酢漬けである(ちなみに、もつと遡るとハワイ語の pimika のルーツは英語の vinegar にある)。元のハワイ語のピミカの母音が i から a に変わり、意味がお酢そのものから酢に漬けた魚料理というふうに変化しているのである。すなわち、音声変化と意味変化の両方を起こしているから言語固有語といえる。ダンプレン(洋風すいとん)は英語の dumpling に由来するが、母音が i から e に変化している。カツオドリを指すブベ(英語の booby に由来する)にも同様の母音変化がみられる。開拓時代の入植者には英語のマサチューセッツ方言を話す人がいたが、この i ↓ e の音声変化はその影響だと思われる。発音が変化している単語もあれば、意味や文法的な性格が変わった単語もある。八丈語(八丈島方言)に由来するナムラという単語が前者にあたる。元々は「魚群」からきたと



ぎょさん(漁師のサンダル)



「またみるよ(また会おうね)」と書かれたTシャツ



小笠原高校学園祭「ビーデ祭」



ピーマカ(魚の酢漬け)

## 小笠原諸島のことばと人びと

小笠原ことばには上述のように、英語やハワイ語、八丈島方言などの単語が入って変化した「言語的固有種」もあれば、原語のまま使われている方言語形はこれにあたる。たとえば、ゴツ（標準日本語「ごと」にあたる）という言い方が小笠原にみられる。「鍋ゴツ捨てる」や「箱ゴツ運ぶ」のように使われる接尾辞である。「ゴツ」は八丈島やその「子方言」といえる南大東島にも分布している語形なので、広域分布種の単語に分類できる。小笠原で「潜る」ことをムグルというが、『日本方言大辞典』をみれば類型は青森、佐渡島、福島、茨城、千葉、神奈川、静岡などに分布する。潜る・ムグルにみられるo↓uの母音交代は小笠原ことばのゴツ（ごと）やマルブ（死ぬ）、ゲッスリ（げっそりしている）といった単語にもみられる。ブツコル（落ちる）もこの類である。東日本諸方言によくみられ

### 言語的広域分布種

横に「ツルロワラ」と記している。小笠原の文献にみられるこの植物のよび名を全部並べるとラウハラ、ラハロー、ラワラ、ラワラワ、ルーワラ、ロハラ、ロハロ、ロハラ、ロワラなど少なくとも九種類の変異形がみられる。

ことからわかるように、小笠原の固有種だが、沖縄にはアダンとよばれる近縁種がある。小笠原のお年寄りに聞けばこの木の名称は「ラワラワ」だというのが、文献によってはさまざまなバリエーションがみられる。小笠原村教育委員会には坂田諸遠という人が一八七四年に編集した『小笠原島真景図』という報告書が保管されているが、そのなかにタコノキの素晴らしいカラーの絵が載っている。絵の横に「ラハローと唱、日本人呼びて蝸の足といふ」と書かれている。この絵が気に入ってか



ラハロー（タコノキ）。坂田諸遠編『小笠原島真景図』より。小笠原村教育委員会蔵



タコの葉細工



ツルロワラ（タコヅル）。阿部操斎の手記より（倉田洋二編『寫真帳 小笠原——発見から戦前まで（改訂版）』1984年 アポック社）

つて研究仲間と一緒につくった『小笠原学ことはじめ』の表紙に使った。

小笠原のハワイ語起源の単語のルーツを調べた延島冬生さんの研究によるとこの木のよび名はハワイ語で「タコノキの葉」を意味する *lau hata* が変形したものだとかわっている。この *lau hata* が起源語ならば、なぜ日本人は「ラウハラ」ではなく「ラハロー」に聞こえたかわからないし、なぜ現在の欧米系のあいだでラワラワとして伝わっているか不思議である。しかし、変異形はこの他にもたくさん

る接頭辞「ブチ」+「落」によって形成されたことばで、八丈島方言でも使われる。類型のブチオチルが岐阜、愛知、山梨、静岡、茨城などに分布する。小笠原には、この「ブツ」のような接頭辞が多く生み出されており、言語学でいう「生産性の高い形態素」となっている。オツやカツ、カン、シツ、ツン、ヒツ、ヒン、ブツ、ブンなどが動詞の頭に付いて、

オツペシヨル（折る）やカツチャク（掻く）、カンマース（かき混ぜる）、シツチャブク（破

る）、ツンムグル（転ぶ）、ヒツカブル（小便を漏らす）、ヒンネジル（捻る）、ブツタラガ（横になつてだらんとする）、ブンノメル（沈める）などの例があげられる。

ノモル（沈む）の原型は八丈島や南大東島のノメロワにみられる。栃木県でも報告されているが、小笠原の移民の歴史を考えると八丈島民がもってきたと考えるのは妥当であろう。「この木は海に浮きもしない、ノモリもしない」のように使われるのである。「いか



時間の単位は「今週」ではなく「今便」



英語による欧米系島民の墓石

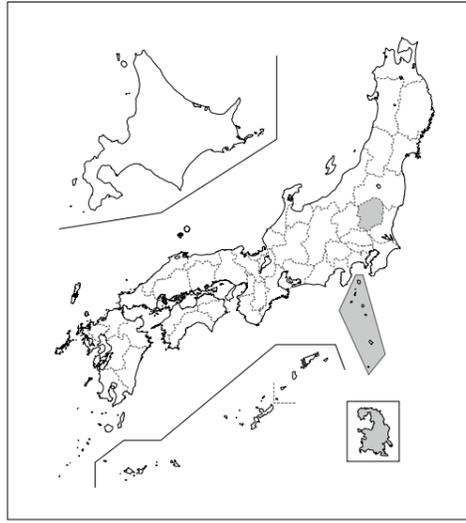
ヒ(ウツボ)があげられる。ハワイ語でウナギ科一般を表わす *puni* に由来すると思われる。小笠原の父島と兄島とのあいだに人丸島(または人麻呂岩)があるが、昔はプヒアイランドともよばれていたようである。欧米系の人たちはナンヨウブダイやその仲間をウーフィーというが、ハワイ語でやはり同じ魚を指す *niu* に由来すると思われる。小笠原に最

初に住み着いたのはアメリカやヨーロッパの西洋人とハワイやタヒチなどのポリネシア諸島民であった。前者にとつてみたことのない動植物が多かったが、後者にとつて地元で似た物に見慣れていたもので、名称をもっていたのである。

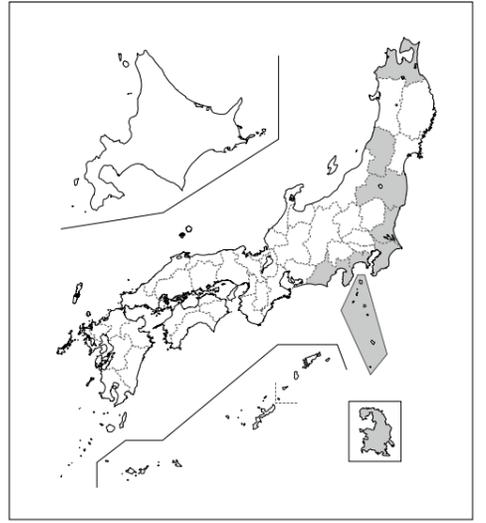
小笠原の周りでミナミイヌズミという魚をよくみかける。大部分は銀色だが、黄色い色彩変異を起こしている個体も珍しくない。これをホーレーやホーレスという。初期の開拓者のナサニエル・セーボレーの息子ホーレス・セーボレーが好んでいたという話があるが、後者の名称が古いということもあって、これが民間語源説であると思われる。一方、黄色染料として利用されたヤロードと同属の木 (*Ochrosia complata*) をハワイ語で *holei* とよぶから、むしろこれが真の起源ではないかと考える。

植物にタマナ(テリハボク、学名: *Calophyllum inophyllum*) があげられる。現代のハワイ語辞典をみると、同じ木を表わす単語として *kamani* が載っているが、じつは一九世紀のハワイ語では *t+k* という音韻変化が起こりつつあって、こうした発音上のバリエーションがみられる。日本でも有名なカメハメハ王は自分の名前をむしろタメハメハと発音していたようである。

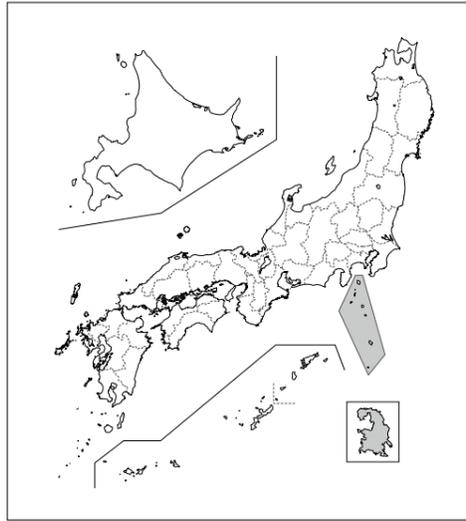
ハワイ語起源の小笠原は生物名が多いが、



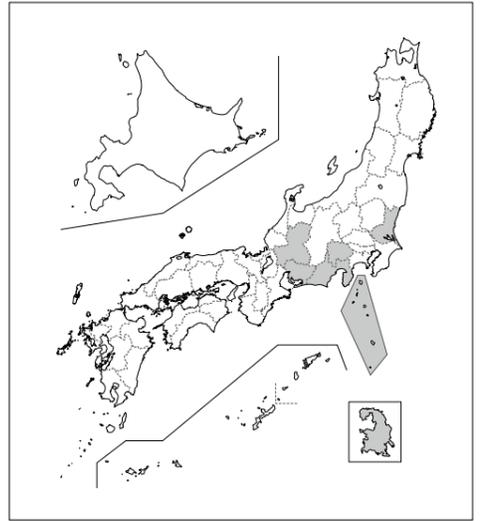
「ノモル」の分布



「ムグル」の分布



「キルイ」の分布



「ブッコル」の分布

りをブンノメロ!」(錨を下ろせ、錨を沈めろ)のように使われる他動詞ノメルと対になっている。これらの単語のなかでもっとも分布領域が狭いのがキルイである。おそらく「着る物」と「衣類」との混交形ではないかと思われるが、現在確認できているのは青ヶ島での使用のみであり、隣の八丈島でも報告されていない。

### 言語的外来種

小笠原諸島に日本語が入ってきたのは一八六〇〜七〇年代である。それより数十年も前から英語やハワイ語が使われていた。そう考えると、小笠原の日本語にこれらの言語からの単語が「借用語」(外来語)として入ってきたのは驚くことではない。しかし、上でみたように、多くの単語は何らかの要素意味、発音、文法的用法)において変化がみられるので、厳密にいえばそれらはハワイや英語圏、八丈島や日本本土にみられない小笠原だけの「言語的固有種」である。そういうふうに定義をすれば、何ら変化もしていない純粋な「言語的外来種」は意外と少ない。以下で比較的音や意味の変化が少ない単語をいくつか取りあげる。ほとんどは上述の延島冬生さんの研究によるものである。

古い文献やお年寄りの会話に出てくるプ

他の物もみられる。たとえば小笠原で「性行為」を意味する「モエモエ」はハワイ語で「寝る、眠る」を意味する *mo* に由来するであろう。小笠原では意味拡張が起こり、女性器を表わすようになっていく。大阪弁など日本語のいくつかの方言でも「女性器↓性行為」という逆の意味変化がみられる。

ハワイ語に由来する地名がいくつかある。現在小港(こみなと)という日本名で親しまれているところは、古い地図にはプクヌイ (*Pukunui*) と記されている。これはハワイ語の *puka nui* 「大きい穴」が少し訛つたものだと思われる。確かにその港へ行けば、波が開けた通り穴が並んでいる。

### 消えゆくもの、受け継がれるもの

上で小笠原諸島の独特な言語を紹介した。若い世代に受け継がれている単語や、内地から移り住んだ新新島民のあいだでもごく普通に使われている単語もあれば、忘れられていくものもある。また上記のような単語レベルの特徴もあれば、欧米系島民のあいだに「混合言語」とでもよぶべき現象もみられる。これは簡単にいえば、日本語の文のなかに英語が句(フレーズ)ごとに取り入れられるというものである。これまで自然会話で採集した



出航するおがさわら丸を、港からに加え、「見送り船」で併走する島民



例を紹介すると、「Just the wives だけが集まった（妻たちだけが集まった）」や台風の浸水に関する話で「water が up to the knee だった（水が膝まで上がっていた状態だった）」のように使われる。「このように英語と日本語の混ざり方には何らかの文法的な決まりがあるのか」と尋ねると島民は「No, me らは適当にぶっこめていただけじゃ」と答える。しかし、こちらが提示した「ぢゃまぜ 文のなかには「いや、それは sounds funny だよ（それは変に聞こえるよ）」とか「Me らはそういう言い方しない」などと否定されることは少なくない。すなわち日本語や英語には「言える文」と「文法的におかしくて言えない文」が存在するように、小笠原混合言語にも文法性判断が可能であることがわかる。たとえば、内地のインターナショナル スクールの帰国子女たちが使っていた「we really 頑張 ed yesterday」という文を小笠原の欧米系に聞かせたところ、日本語の動詞「がんばる」に英語の過去形 ed を付けるのは言えない（言語学の専門用語で「非文」と言う）という反応が返ってきた。こうした事実から筆者は小笠原混合言語は単なる恣意的なミックスではなく、独自の文法的ルールをもった言語体系へと発展しているといえる。

小笠原のような接触言語を研究すれば日本語のより変わりやすい部分と接触に耐える部

分がみえてくるかもしれない。例をあげると上述の例にあったように、一人称代名詞は「わたし」や「ぼくら、あたしたち、おいら、われわれ」などではなく、「me（単数形）」と「me ら（複数形）」となっている。小笠原混合言語では数字（助数詞を含めて）、時間に関する表現、代名詞などの表現は英語になる傾向が強い。逆にいえばこれらの表現は日本語が避けられる、日本語の変わりやすい部分といえるかもしれない。いずれにしても、小笠原独特な混合言語は米軍統治下に生まれ育った現在の中高年の欧米系にしか使われていなくて、彼らの世代とともに消える「全滅の危機に瀕した言語」といわざるを得ない。

- 近年、世界中にみられるこうした「危機言語」を記録保存する活動がおこなわれている。筆者やそのゼミ生は、小笠原島民の協力を得て、島民の自然会話を録音し、文字起こしをおこない、資料集やCD-ROM 付きの『小笠原ことばしゃべる辞典』を刊行してきた。しかし、小笠原独特な言語文化がこうした記録だけではなく日常生活の生きたことばとして残るのが望ましいことはいままでもない。
- 【小笠原シリーズ（すべて南方新社刊）】
  - シリーズ1  
タニエル・ロング 編著  
『小笠原学はじめ』二〇〇二年
  - シリーズ2  
タニエル・ロング、稲葉慎 編著  
『小笠原ハンドブック——歴史、文化、海の生物、陸の生物』二〇〇四年
  - シリーズ3  
タニエル・ロング、橋本直幸 編  
『小笠原ことばしゃべる辞典』（CD-ROM 付き）二〇〇五年
  - シリーズ4  
阿部新著  
『小笠原諸島における日本語の方言接触——方言形成と方言意識』二〇〇六年
  - シリーズ5  
ロバート・D・エルドリッチ 著  
『硫黄島と小笠原をめぐる日米関係』二〇〇八年
  - シリーズ6  
真木太一、真木みどり 著  
『小笠原案内 気象・自然・歴史・文化』二〇一二年

小笠原諸島の  
ことばと人びと